

ワークショップの進め方

1

児童・生徒たちへ、難民の写真を数点(例/右写真①、②)見せ、写真からどんなことが読み取れるかを問います。

ポイント

- 「何がないか？」を問うことで、「家がない」、「食糧がない」、「服がない」等の意見が出ます。
- 「難民にないのはモノだけですか？」と再度問い返すことで、「自由がない」、「権利がない」、「生きがいがない」ことに児童・生徒たちは気づきます。

2

難民とはどんな人たちなのか、なぜ避難しなければならないのか、その実態を説明しましょう。

ポイント

- 難民とは「ふるさとを追われ、国外に避難し、あらゆる面で不自由な状態に追い込まれた人々」であり、時には20年以上にも及ぶ過酷な避難生活を送っていることを伝えましょう。
- 2015年6月にUNHCR本部が発表した「Global Trends 2014(年間統計報告書)」によると、2014年度末で避難を強いられた人の数は5,950万人とされています。この数は、世界中で122人に1人が難民や、庇護申請者、国内避難民になったことに相当します。

3

難民の実態を紹介したうえで、今度は「難民の人たちにとって、私たちにない(不足している)ものは何か？」を問きましょう(例/右写真③、④とともに)。

ポイント

- 難民の人たちが「たくましく生きていること」、「お互いが助け合っていること」、「モノが不足しても分かち合っていること」に、児童・生徒たちが気づくよう、導きましょう。

キーワード

たくましさ、助け合う気持ち、感謝 等

4

「難民の人にも、私たちにもあるものは何か？」を問きましょう(例/下写真⑤とともに)。

ポイント

- 「難民の人も、私たちもみな同じ人間」であることを伝えましょう。

キーワード

命、未来、笑顔、希望、尊厳 等

5

難民支援のために、「私たちにできることは何か？」を考えましょう。

ポイント

- 「将来、自分にできそうなこと」、「今の自分にできること」、「日本の社会にできること」の切り口から、それぞれ意見を出し合います。
- 「日本にいても、できる支援はたくさんある」ということを伝えましょう。

教職員の皆さまへ

国連UNHCR協会ホームページ上の「団体・学校の皆さまへ」コーナーに、学校での学習実践例など、参考情報を掲載しています。ぜひ、ご覧ください。

また、授業で使用する資料や写真は、貸し出しも可能です。当協会までお問い合わせください。

<http://www.japanforunhcr.org/>



写真⑤ © UNHCR/H.Caux



写真③ © UNHCR/L.Addario

写真④ © UNHCR/J.Kohler



写真① © UNHCR/F.NOY

写真② © UNHCR/G.Beals

授業で、「難民支援」を 取り上げよう！

国連UNHCR協会には、教職員の方から、「難民支援について授業で取り上げたいが、どのようにしたらよいかわからない」という声が届きます。今号では、グローバル化が進むこの世界で大きな課題となっている難民問題に関するワークショップの進め方について、ご紹介します。

紛争や迫害などの人災によって、故郷を追われて避難しなければならない難民。写真を活用し、彼らと私たちに「ないもの」と「あるもの」を考えながら、難民支援について考えてみませんか。

国連UNHCR協会では、協会でインターンを経験した大学生を中心とした学生団体「SOAR(ソア)」と連携し、小・中・高校で、児童・生徒たちに難民支援に関するワークショップを開催するサポートをしています。

児童・生徒たちに「難民支援」を考えてもらうために

荒川区立第四中学校で、SOARメンバーによる ワークショップを開催！

2016年2月13日(土)、東京都荒川区立第四中学校3年生2クラスを対象に、SOARメンバーである川畑真帆さん(東京大学3年生)、宮鍋誠さん(早稲田大学2年生)、伊藤ひろさん(一橋大学3年生)、増田恵子さん(早稲田大学3年生)による「難民支援」ワークショップが開催されました。



授業前半では、「いのちの持ち物けんさ」(『教職員共済だより』152号、16、17ページ参照*)を行い、自分が持っているものやアイデンティティを構成するものをすべて書き出し、それを失ったとしたらどんな気持ちになるのか、グループ内で発表してもらいました。生徒からは、「衣服や時計を失っても代わりのものが手に入るけれど、家族や友だちを失ったら絶望してしまう」といった意見が出されました。そうした喪失体験をしている難民の人がいかに多いかを、SOARメンバーは生徒たちへ説明します。

後半は、難民高等弁務官事務所(UNHCR)の活動を紹介するとともに、「ワークショップ」(左上参照)を通して、「難民支援への入り口は私たちの身近にあり、日本にいてもできる支援はたくさんある」という気づきを促すとともに、生徒たちに「自分にできることは何か？」をグループ内で話し合ってもらいました。ワークショップを依頼した片桐育美先生は、「難民問題を遠い国で起きている出来事として捉えるのではなく、自分たちもつながっているという事実を考えてほしい」と語ります。

※「教職員共済だより」のバックナンバーはホームページでご覧いただけます。